

私の図書館の思い出

安田 昌平 助教

(ミクロ経済学)

私は、大学生になって図書館を利用することが本当に多かった。小中高では、図書館をほとんど利用したことがなく、勉強する場といえば学習塾だった。しかし、大学では勉強しようとする、図書館しか選択肢がなかったため、時間があるときは図書館にこもっていた。特に、試験期間中は、朝一番に図書館に行き、閉館間際まで居座っていた。もちろん、自宅で勉強することも可能だったが、自宅には誘惑が多すぎたため、物理的に誘惑から離れる必要があった。また、図書館に行くと、なんだか勉強のやる気が上がるような気がした。私のお気に入りの席は、決まって図書館内を見渡せる席だった。開放感があって、だれもいない図書館でポツンと勉強している自分の哀愁に浸っていたかった。開放感がある場所で勉強するのは今でも好きで、自然光にあたりながら本を読むとリフレッシュできる気がしている。

当時は、授業の成績はもちろん、経済学検定で良い成績を取りたかったので、図書館に行けば、ミクロ経済学、マクロ経済学の演習本をせっせと解いていた。すると、必ずと言っていいほど、授業で習わない上級の内容が出てきては、専門書をあさっていた。もちろん、所有する専門書では対応できない問題もあるため、そのような時は、図書館をウロウロとしながら、大学院レベルの専門書を見つけて、頭を抱えながら問題を解いていた。上級の専門書を読むと、今自分は経済学の真髄を学んでいるという優越感を感じた。その一方で、数式も多く、とにかく難しい印象だった。

大学2年の後半には、経済学検定で良い成績をとれたこともあり、指導教授から大学院に行ってみないかといわれた。その時は、大学院という選択肢は全く考えていなかったもので、戸惑いもあったが、面白そうだし行ってみようかなと、比較的気楽に考えていた。今思い返せば、図書館で読んでいた、あの上級の専門書をしっかりと学べるのだというワクワク感もあった気がする。

その日からは、ほぼ毎日図書館に行き、より一層、ミクロ経済学とマクロ経済学の勉強に励んだ。3年からは、少人数の勉強会で計量経済学の英語のテキストを輪読することになり、計量経済学の専門書も図書館で手にすることが増えていった。英語の教科書というだけでビビっていた私は、図書館で日本語のテキストと英語のテキストを並べて、とにかく内容を理解しようと努めた。幸いにも、日本語のテキストは図書館にたくさんあったの

で、わからない箇所があれば、棚からごっそりとテキストを机に運び、テキストを山のよ
うに積み上げて必死に勉強していた。

大学院進学後は、自分の学習机が配給されたことで、学部時代ほど図書館を利用する機
会は少なくなったが、それでも集中して勉強したいときは図書館を利用していた。特に、
大学院では様々な分野の最先端の研究を聞く機会が多々あり、その内容を理解するた
めに、その分野の本を図書館で見つけては、関連分野の本もパラパラと読んでいた。これ
により、分野間の関係も整理でき、最先端の研究も何となく理解できた。

このように、図書館は私にとって大切な勉強の場だった。一日中、図書館で勉強し、閉
館と共に図書館を出たときの充実感は何とも言えないものだった。現在は、コロナの影響
でなかなか図書館の利用もできないが、落ち着いたら、大学生時代を思い返しながら図書
館で一日過ごしてみたいなとおもっている。

学生の皆さんも、時間があるときに図書館に足を運んでみてはいかがでしょうか。図書館で
勉強すると、勉強スイッチが入って気分転換にもなるし、興味のある分野の本を気軽に手
に取ってみると、意外な発見があって面白いですよ。